

をフィールドとする牛沢さんの案内を受けられたこと。このあたり、一見、自然のままのようだけれど、人の入込み、スキー場や採石などで急速に変ぼうしつつあるという。ほんとに街に近く森と川と山に恵まれたこんないい観察場所があったなんて、それが急速に失われつつあるなんて知らなかったのであります。そして、きれいなせせらぎを見ながら、春や夏にまたこなければならぬいと話しあったのであります。

手稻宮城の沢

金 上 由 紀

九月の例会では、友の会始まって以来の事件がおこりました。三日の予定が当日雨で急速十日に変更されたのです。幾人かへの電話と、地下鉄琴似駅のバスターミナルに日野間さんがはりついて日延べの連絡をしたのですが、宮城の沢のゲート前に直接集まった連絡もれの人が四名一。

いつまで待っても皆がこないの、四名だけで観察会をされたそうです。雨もさ程ひどくは降らず充実したひとときだったとか。牛沢先生、村野さんと実力者が揃ったとはいえ、ここが並のサークルと植物友の会の違いではないでしょうか。

そんなこんなで九月十日は参加者16名といつもより少人数の例会となりましたが、北見から帰ってこられた加藤和子さんご夫妻がみえて、あの楽しいおしゃべりと笑い声で陽気な一日となりました。

宮城の沢は勾配のゆるやかな林道を沢が幾回もまいて、右、左の崖からはジワジワと水が湧き、のんびり気楽な散歩をしながら様々な植物を観察できるコースです。

あたりはもうすつかり秋で、花はタデぐらいでしたが、実は色々なものを観察できました。私のメモではノリウツギ、オオカメノキ、ツリバナ、サワツバ、アカソ、ウシタキソウ等とありますが、中でも加藤さん推薦のキツリフネの実はまるでアーモンドかクルミのような香ばさで、皆で手の平にはじかせて集めては何度も味見をしました。較べてみるとツリフネソウの実は少し青くさいようでした。



他にはスマレサイシンやヤブマメの実を原先生の解説でじっくり見ました。三つにはじけた莢に行儀よく並ぶスマレサイシンの種子。アイヌの人々の食料だったという地上と地下のヤブマメの実。

ヤマブドウやコクワの実があちこちにぶらぶらんと下っていて、この山も今年は大豊作です。「笈田さんにいうなよー。全部とられちゃうからなあー」と見つけるたびに日野間さんが皆に注意していましたが、それは無理というものです。笈田一子の地獄耳ならぬ(地獄耳)には誰もかないっありません。

マタタビもたくさんなっていました。これには笈田さん目もくれないので、加藤さんと私とでマタタビ酒をつけるべく山分けしました。マタタビ酒の薬用効果を調べてみると「神経痛、腰痛、リュウマチ、滋養強壯」とありました。加藤家と金上家、マタタビ酒で平成二年も元気にくらせそうです。

この日日野間さんは「僕は今日はしっかりやるんだぞ。」と宣言して、ソダからイネ科カヤツリグサ科まで丹念にメモしていました。私のメモは五十三で終わっています。日野間さんのリストはどんなでしょうか。楽しみにしています。又湿原のでき方についても、地面に図をかくて丁寧に教えてくださいました。ありがとう。

とにかく、長くなって列の前へ後へ連絡係とどび歩くのも含めて、日野間さん大活躍の一日でした。

山道に半分埋まっていた石英の結晶の大きな固りを拾ったこと。帰途アオバトを見に寄った張碓の崖になんとクマタカが飛んできて、雄姿をたっぷりと見せてくれたこと等々、私にとって最後まで幸運な秋の一日でした。